

韓国京畿道外国語教育研修院国内研修における 「会話」および選択科目クラスの実践報告

小池 康

要 旨

本稿は、今年度で5回目を迎えた京畿道外国語教育研修院での現職日本語教師国内研修において、筆者が担当した「会話」および選択科目「アテレコに挑戦」についての報告である。まず、この研修の概要を述べた後、「会話」科目、次いで選択科目の実践報告をし、最後に今後の課題について述べる。

【キーワード】 会話 ディベート 発音練習 音声ファイルでの宿題提出 アテレコ

Report of "Oral Skills Development" Classes and "Dubbing" Class in the In-service Japanese Language Teacher Training Program at the Gyeonggi-do Institute for Foreign Language Education in 2009

KOIKE Yasushi

【Abstract】 This is a report of "oral skills development" classes and "dubbing" class in the training program for Korean teachers of Japanese language at the Gyeonggi-do Institute for foreign language education in 2009.

After an outline of this program is described, "oral skills development" and "dubbing" classes are described. Finally, problems for future consideration are pointed out.

【Keywords】 oral skills development, debate, pronunciation practice, homework using sound/voice recording software, dubbing

1. はじめに

2009 (平成21) 年 8 月26日から 9 月25日にかけて、大韓民国 (以下「韓国」とする) の京畿道平澤市において現職日本語教師の国内研修 (以下「本研修」とする) が実施された。^{ビョンテック} 筆者は 4 クラス各10回の「会話」科目と全 8 回の選択科目を担当した。本稿はその報告である。

2. 本研修の概要

研修は、韓国では「中等日本語専門課程」¹と、日本 (筑波大学) では「京畿道外国語教育研修院現職日本語教師研修」と呼ばれ、韓国京畿道平澤市にある京畿道外国語教育研修院にて2005 (平成16) 年より 5 か年計画の予定で始められたものである (このいきさつについては姜2006を参照)。今年は 5 年目で、つまり今年度で本研修は一区切りを迎えたわけである。

この研修は、京畿道にある公立・私立の中学校および高等学校で外国語科目としての「日本語」を担当している韓国人の教師を対象とした研修であり、毎年48名が参加する (年度によっては辞退者や中途辞退者もいるので若干の減少はある)。今年度の場合、研修候補生はインターネットを使った「オンライン研修」を受講し、その中で成績上位の48名が本研修に参加することとなったが、1名の辞退者があり、結局47名が参加した。しかし、体調不良のため途中で辞退した研修生もいたため、最終的には46名であった²。男女別では男性 4 名・女性42名で、圧倒的に女性が多かった。研修生は12名ずつ四つの班に分けられ、後述する「必須科目」はこの班単位で受講する形となっている。

日本語を教授する講師は、過去 4 年間は筑波大学から 3 名、国際交流基金のソウル支部から 1 名の計 4 名が派遣されていたが、今年度はソウル支部の担当者の都合がつかなかったため、筑波大学から 4 名が派遣された。

今年度の研修内容は、すべての研修生が受講しなければならない「必須科目」として「文法」「読解」「聴解」「語彙・作文」「会話」「特集」の 6 科目と、これとは別に各研修生が自分の希望で選択できる「選択科目」とで構成されていた。「選択科目」は 4 名の講師がそれぞれ一つのテーマを決め、それに沿った内容のクラスである。筆者は「アテレコに挑戦」という科目名で、アニメのセリフに声を合わせることを通して、日本語の発音やリズムを体験するクラスを担当した。

各「必須科目」および「選択科目」についての詳細は、それぞれの担当者の報告に譲ることとし、本稿は筆者の担当した「会話」および選択科目について報告する。

3. 必須科目「会話」

3.1 「会話」の目的

今年度の「会話」は、以下の点を達成目標に設定した。

- ・話すことを通じて、内容、語彙、文法、表現などの上達を図る。
- ・より自然なアクセント、イントネーションで話すことができるようになる。
- ・相づち、終助詞、間投詞などの会話ストラテジーを使い、自然な会話ができるようになる。
- ・文法的に正しく豊かな表現で「紹介」「説明」ができるようになる。
- ・相手や場面によって普通体、丁寧体、敬語が適切に使い分けられることができるようになる。
- ・自分および他者の感情を豊かに伝えることができるようになる。
- ・ディベートを通して、根拠を用いて自分の意見を論理的に述べるができるようになると共に、早くかつ聴き取りやすい発音で話せるようになる。

これらの目的の達成のために、教科書および教室活動に工夫を凝らした。以下、本節では、3.2で教科書の構成について説明したあと、3.3では会話の、3.4ではディベートの具体的な授業活動について述べ、3.5でウォーミングアップとして行なった発音練習について報告する。

3.2 教科書の構成

今年度の「会話」は1コマ90分の全10回の構成となっている。

過去3年間³⁾の「会話」は、「会話(中)」と「会話(上)」の二つのレベルに分けて9回ずつ実施されていたが、今年度より「会話」という一つのレベルでの実施となった。この理由としては、過去の会話クラスでは受講する研修生によって口頭表現能力に大きな差が見られる場合が多く、一つのレベルでは対応しきれなかったのであるが、昨年の研修からその差が非常に小さくなり、あえて二つのレベルで実施する意味がなくなったと判断されたためである。

また、今年度は研修院からの要望により「ディベート」も含めた。2009年11月に韓国国内で日本語によるディベート大会が予定されており、その大会に今回の研修生を出場させるため、予選を本研修中に行なうこととなった。そのため、「会話」でディベートも取り入れることとなったのである。

これまでの研修でもディベートが教材に組み込まれたことはあるが、それはあくまでも会話のスキルアップの一環として導入されたものであった(小野寺・杉浦2007)。しかし、今年度の場合はディベートのためのディベートという感が強い。それでも会話上達の要素

も十分に踏まえた授業内容になるように配慮したことは言うまでもない。

以上のような経緯を踏まえ、今年度の「会話」教科書は以下に示すように＜会話＞と＜ディベート＞の二つの分野から構成されるものとなった。

＜会話＞

第1課 自己紹介

第2課 紹介・説明する

2.1 映画の紹介

2.2 趣味を話す／印象や感想を話す

第3課 体験を話す：理想の教師

3.1 理由を述べる

3.2 相手の体験や経験を聞きだす

第4課 意見を述べる：私にも言わせて

4.1 意見を言う

4.2 感情表現を使って、自分の意見を述べる

＜ディベート＞

第5課 くじ引きトーク

第6課 ディベートの実践1

第7課 ディベートの実践2

第8課 ディベートの実践3

基本的には一コマに一課もしくは一単元を充てた。しかし、「2. 紹介・説明する」は内容的に今年度の研修生には簡単すぎたので、2.1と2.2の両単元を1コマで実施した。

上掲の各課は、これまで使用されてきた「会話（中）」と「会話（上）」の教科書⁴より、以下の点を重視して実施する課を選び（ただし＜ディベート＞は除く）、加筆・修正を加えたものである。

1. 研修生が勤務校での日本語クラスの活動で使用可能な（または応用可能な）内容の課

2. 教師としての研修生自身が内省するような内容の課

1は本研修での内容を本研修期間内だけで終わらせないものにするという観点で、2は本研修を通じて、なぜ自分が（日本語）教師なのかを改めて見つめ直す機会を持たせたいという観点で設定した。これには、この研修を単に日本語のレベルアップだけに終わらせたくないという筆者の願いが込められている。1の観点で選んだ課（単元）は第1・2課および4.2で、第3・4課は2の観点から選んだ。

3.3 <会話>の授業活動

<会話>の授業活動については、特に研修生同士で活発な意見交換ができるよう、基本的には毎回ペアか3～4名のグループで会話を行なうという形式をとったが、みな積極的に自分のことを話し、かつ相手のことを聞く姿勢が見られた。教科書の内容に沿っていけば会話量は十分に確保できるものであったし、また研修生たちも会話することに非常に積極的であったので、教師から指示を出すことはほとんどと言っていいほどなかった(せいぜいペア／グループのメンバーを交代させる時の指示ぐらいか)。授業内でのペア／グループの交代は授業活動の様子を見ながら切りがよいところで行ない、おおむね1～2回交代させた。その際、教師は各回のメンバーをメモしておき、ペアやグループのメンバーができるだけ重複しないように配慮した。

授業の進め方としては、会話のトピックをクジ引きで決めるという方法をとることもあった。たとえば、「4.2 感情表現を使って、自分の意見を述べる」においては、あらかじめ3～4名のグループを作っておき、まず教科書記載のさまざまな感情表現の意味・用法を確認する。その後、一つの感情表現を短冊状の紙に書いてクジとし(たとえば、「ドキドキした話」「がっかりした話」「耳が痛かった話」など)、引いたトピックで会話を進行させた。4～5分経ったところで(もしくはクラス内の雰囲気有一段落した頃合いを見計らって)、次のメンバーにくじを引かせ、同じように会話を進めさせた。このようにすることで、最低でも一人一回は何らかのトピックで話をしなければならず、また聞き手も自分の経験と比較し、それを述べることで、お互いの情報量が増し、結果各グループの会話は非常に盛んなものとなった。

3.3 <ディベート>の授業活動

<ディベート>の授業活動は、初回は導入としての「第5課 くじ引きトーク」から始め、2回目以降は賛成／反対のチームに分かれてディベートを行なった。

第5課は、クジを引いて、出てきたトピック(図1参照)についてすぐに話し始めるという、いわば「会話の瞬発力」を狙いとしたものである。ディベートを行なう際には、相手チームの意見に対してすぐさま回答を考え、かつ述べる準備をしなければならず、その練習として第5課をディベートの最初の回に入れたのである。

あるテーマに関して賛成／反対のチームに分かれて意見を戦わせるといった、本来のディベートの形式を取り入れたのは、第2回目(第6課)からである。

- ・あなたはどんなとき、幸せだと思いますか？
- ・今までで一番感動したことは何ですか？
- ・今までで一番怒ったことは何ですか？
- ・今までもらったプレゼントの中で一番驚いたものは？
- ・初めてデートはどこへ行きましたか（行きたいですか）？
- ・一番大きな失敗は何ですか？（ただし、笑える話）
- ・あなたが飼っている（飼いたい）ペットは何ですか？
もし飼いたくない場合は、なぜですか？
- ・あなたの趣味は何ですか？なぜ好きですか？
- ・あなたのくせは何ですか？

図1 「くじ引きトーク」のトピック例（一部）

進め方は次の通りである。まず、教科書記載の6つのディベートのテーマ（図2参照）をクジにし、それを班長に一つ引かせ、テーマとした。賛成／反対のチームはMicrosoft Excel の関数「Random」（乱数）を用いて、アトランダムにメンバーを決めた。

ディベート初心者者の研修生がほとんどであったため、第2回目（第6課）はディベートのやり方を詳しく説明したり、授業内で賛成／反対チームに分け、それぞれの意見を考え

第6課（各班ともこのうち二つのテーマをクジ引きで選ぶ）

- | | |
|-------------------|---------------|
| ・夏より冬の方がいい | ・海より山の方がいい |
| ・高校生のアルバイトは禁止すべきだ | |
| ・高校生も携帯電話を持つべきだ | |
| ・漢字の勉強は無駄だ | ・お金より時間の方が大切だ |

第7課（同上）

- | | |
|-----------------------|---------------|
| ・喫煙は犯罪だ | ・親戚づきあいは無駄だ |
| ・電車やバスの優先席は不要だ | ・人は内面より外見が大切だ |
| ・夫／妻より子供が大切だ | ・お金よりも愛は尊い |
| ・一般市民も銃を持つべきだ | |
| ・ユーロのような統一通貨がアジアにも必要だ | |

第8課

- ・学歴社会は無意味である

図2 ディベートのテーマ

させたりと、比較的ゆっくりと進行させた。しかし、やり方を理解した第3回目以降は、あらかじめ次課のテーマ群の中からテーマを二つ決めておき（これもクジを使用）、次回までに各自賛成／反対の意見を準備しておくように指示した。二つのテーマのうちどちらを先にやるか、また自分が賛成／反対のどちらのチームになるかなどは、次の授業開始時にクジで決めた。また、回を追うごとに、単に自分（たち）の主観的主張を述べるだけではなく、主張の根拠として他人の文献を援用させたり、また乱数を用いて審判の役もやらせるようにした。＜ディベート＞の最終回である第8課では、すべての班に共通のテーマ「学歴社会は無意味である」を課し、また本研修でのディベート大会直前ということもあって、その時間配分でディベートを行なった。

研修生には、制限時間のある中で自分の意見を述べることに当初は戸惑いも見られたが、回を重ねるごとに時間内で自分の意見をまとめられるようになった。また、制限時間を意識することで、早くかつ明瞭に話せるようにもなった（特に最初の意見陳述を行なう場合、あらかじめ自分の読む原稿が決まっていることもあって、早くかつ正確なアクセントやイントネーションに気を配った発話が見られた）。これらの結果を見ると、ディベートは研修生の会話上達の面でも少なからず良い影響を与えたものと思われる。

今年度の場合、ディベートは、後日大会があるということもあって、これまでの研修よりも比重が置かれたものとなった。ディベートは賛成と反対の両方の意見を準備しなければならず、それが他の科目の予習や宿題とも重なったため、研修生には負担になったようである。しかし、実際にディベート大会を行なってみると、各チーム様々な想定をして準備をしてきており（中にはほとんど徹夜した者もいた）、大会として恥ずかしくない程度のものにはできたと思う。研修生は、選び抜かれてこの研修に参加しているのであり、その点で負けず嫌いな一面が現われたと言えよう。

3. 4 発音練習

3. 4. 1 ウォーミングアップとしての発音練習

今年度の会話クラスでは、各回の始めにウォーミングアップ（おおむね20分前後）として発音練習（発音チェックを含む）を取り入れた。これは、以前よりこの研修で発音指導を要望する意見が多かったことを筆者が知っていたことと、筆者が研修生の会話能力の高さの割にはイントネーションやアクセントが気になっていたことが挙げられる⁵。そのため、本研修では発音・アクセント・イントネーションの基本的な事項について確認し、また研修生自身が教示できるよう具体的な方策も提示した。これまでの研修でも研修生に対する発音のクリニックを実施した例はある（小野寺・木戸2008）が、会話の全クラスを通じて行なわれたことはなかったようである。

学習項目は、王ほか（1987）、松崎・河野（1998）、河野（2009）などを参考に韓国人が誤

りやすい項目を選んだ。また、練習用の問題文はNHK出版(2005)や塩原(1987)などから選んだ。

発音の指導例としては、一般に韓国人が発音を苦手とする「ツ」と「チュ」、「ゾ」と「ジョ」、「ジ」と「チ」を取り上げ、クラス内で発音練習をした。しかし、教師(筆者)の発音をまねしてうまくできたとしても偶然の可能性もあるので、基礎的な音声学的知識(たとえば口腔内の構造や調音点など)を織り交ぜつつ、発音法を説明した。

たとえば、「ゾ」は発音できるのに「ジョ」の発音ができない研修生に対しては、まず「ジ」と「ヨ」を別々に言わせ、それができることを確認した後、「ジ・ヨ」→「ジヨ」→「ジョ」と徐々に縮めて言わせた。また、「ゾ」の発音も「ズ」と「オ」を別々に言わせ、これも同様に「ズ・オ」→「ズオ」→「ズォ」→「ゾ」となるよう指導した。

アクセントやイントネーションの指導は、日本語と韓国語の基本的な相違点を意識させるよう指導した。たとえばアクセントでは、日本語では単語の一音節目と二音節目が“高低”よりも“低高”のパタンになることが多い(特に複合語アクセントは多くの場合“低高”パタンになること)を強調した。この際、インターネット上よりピアノのソフト(「TinyPiano.c v0.81j」)⁶をダウンロードし、アクセントの違いを音階の違いで示したりした。練習項目には、他にもアクセントの異なる同音語(図3)や連母音(図4)なども入れた。

ウォーミングアップ1 一拍語・二拍語のアクセント①ー


1. 葉が落ちている	歯が落ちている	
2. 気になる	木に成る	
3. きれいな蔓	きれいな鶴	
4. 鼻が高い	花が高い	
5. 肩に張りがある	肩に針がある	

図3 発音練習用プリントの例(その1)

会話 発音練習 母音・長音・連母音

1. 経営委員会
2. 親孝行の高校生
3. 居合い、言い合い、愛煙家
4. 大きな扇
5. 奥の大奥様
6. 法王を覆おう
7. 総理の草履とジョリーのソリ
8. お綾や、親にお謝り



図4 発音練習用プリントの例（その2）

イントネーションの指導では、韓国語では文節の切れ目を上がり調子で言うのに対して、日本語では下がり調子で言うことなどを指摘し、注意を喚起した。

日頃から日本語のドラマや歌を視聴している研修生にとっては、上記のことはそれほど難しくなく受け入れられるようであったが、あまり日本語に接しない研修生にとっては、理解が難しいようであった。中には、韓国語にはアクセントがないと思っている研修生もいたが、筆者が「アンニョンハセヨ」とか「アンニョンハセヨ」などと、韓国語に意図的にいろいろな節をつけた言い回しをして聞かせたところ、おかしく聞こえるとのことだったので、それがアクセントだと教えた。「アクセント」や「イントネーション」という言葉では知っているが、実際には意識化できていなかった研修生も、この方法により多少意識化ができるようになったようである。

3.4.2 宿題

「3.4.1 ウォーミングアップとしての発音練習」で練習した項目を宿題として課した。内容は、課題をパソコンで各自の発音を録音した音声ファイルを作成させ、それをeメールで提出させた。筆者は、提出された各研修生の音声ファイルをチェックし、必要に応じて修正・コメントをした。本来なら筆者も音声ファイルと文書ファイルでコメントを返すべきであったが、時間の都合上、文書ファイルのみで返信をした。だが、その場合でも、高いアクセントの部分を赤字で示すなどの工夫を加えた。

この方法は、研修生にとっては次の点で新鮮だったようである。まず、自分の声を録音し聞くことで自分の声や発音を客観的に認識できた点、および筆者のコメントを見ながら提出した自分の発音等を聞き直すことで、各自の発音上の問題点が理解しやすかった点である。研修生の多くは、発音やアクセントなどに問題があると意識していても、実際に自分がどのような発音やアクセントをしているのかを聞いたことがある者は少なかった。この宿題の方法により、アクセントに自信のない研修生は、筆者のコメントを見て自主的に質問・確認・再チェックをしに来た。

4. 選択科目「アテレコに挑戦」

本科目は、後述するように日本語の発音・アクセント・イントネーション・リズム等の上達を目指している点で、必須科目の「会話」と通じる部分が多い。よって、本稿では、まとめて本科目の実践報告もする。

受講者数は12名で、すべて女性であった。

4.1 本科目の目的

本科目の目的は以下の通りである。

- ・セリフ等を模倣することで、日本語の発音の基礎を固め、さらに日本語のリズムやイントネーションの上達を目指す。
- ・セリフ等を聞いて書くことで、聴解力の上達を目指す。

さらに、この学習効果としては、「登場人物の話し方をまねることにより、日本語のアクセントやイントネーション、間などの非言語的要素を意識化し、身につけることができるようになる」ことを想定した。

4.2 本科目の構成

本科目は全8回であった(1コマ60分)。8回目終了後、各選択科目の発表会(本科目の発表時間は20分)が行なわれた。

初回はオリエンテーションと共に、河野(2009)や安川(2009)を援用して発音・発声・イントネーションなどの基本的事項を確認した。

第2回と第3回では、日本のアニメ『まんが日本昔話』より「舌切り雀」を個人的に録画したものを用いた。12名の受講者を4名ずつ3グループに分け、各班で主要な登場人物である「おじいさん」「おばあさん」「チュン子(舌を切られる雀)」「ナレーター」のセリフ(ナレーションも含む)を書き取らせ、声を当てさせた。声音を使ったり、感情移入して演じる研修生もいたが、やはり最初ということもあって全体的には照れや戸惑いが見られた。しかし、元のアニメのセリフをまねるというタスクは達成できた。

第4回目からは発表会に向けての練習を中心とした。発表会では、以下の二つの作品を行なうことにした（両作品とも筆者がテレビ放送より個人的に録画したものを使用）。

1. テレビアニメ『まんが日本昔話』より「カチカチ山」

登場人物：ウサギ、タヌキ、おじいさん、おばあさん、ナレーター

2. アニメ映画『おもひでぽろぽろ』より「分数のテスト」のシーン

登場人物：タエ子（主人公、三女）、ヤエ子（二女）、お母さん、なな子（長女）

これらを選定した理由は、1は方言的な表現やイントネーションが使われていることが若干ネックになると思われたが、ゆっくりした口調で比較的聞き取りやすいナレーションやセリフが多かったためである。実際には、方言的な表現やイントネーションがあっても、今回の研修生にとっては逆に日本語のバリエーションに接する良い機会となったようである。2は日常生活の一場面を切り取ったシーンで、セリフも東京方言かつ自然な早さであったため、候補に挙げた。登場人物の感情の起伏も表現しなければならない点で難しさもあったが、今回の研修生には妥当であった。

いずれの作品（シーン）も10分以内であり、この二つでちょうど発表時間に収まる点も、選定した理由である。

第5回目では担当する役を決めた。作品1ではナレーターが、作品2では登場人物の「ヤエ子」のセリフが分量的に多かったので、担当を2名とした。また、発表会での司会を1名選んだ。彼女には司会と作品紹介をしてもらうことになったが、東京方言のアクセントで、かつ韓国語のイントネーションにならないように話すことを課題とした。

各作品は、研修院内でのみ視聴ができる研修院作成の特別なサイトに入れ、時間が空いた時にいつでも視聴できるようにしておいた。

第6回目ではセリフのチェックの後、実際にアテレコをさせ、発話のリズムやイントネーション、登場人物の感情などをチェックしていった。

研修生たちは、セリフのリズムや言い回し、中には声音まで似せたりして、工夫を凝らしてくれた。また、効果音なども独自に工夫していた（たとえば波の音を表現するために、ペットボトルに水を3分の1程度入れ、その振り加減で波の大小を表現するなど）。

このような研修生たちの創意工夫もあって、内容的には満足いくものとなった。しかし、映像操作の技術的な面で不備もあったので、最後にそれを挙げておく。

今回の作品は筆者が個人的に保有していた作品を使用したために、音声の調節がうまくできなかった。たとえば、作品のセリフ部分だけを消去（もしくは音量を0に）して、BGMや効果音などを残すことができなかった。あらかじめ作品の音声のみを別途MP3などの音声ファイルにしておけば、編集・加工はできたはずであった。

5. 結果と反省

今年度の「会話」および選択科目は、総じて研修生には好評だったようである。特に「会話」におけるアクセントやイントネーションなどについては、日頃チェックをされる機会がほとんどない研修生が多かったらしく、授業内や宿題に対するコメントなどで問題点を指摘されることは、彼らにとっては新鮮であり、新たに自分の日本語に対する課題を見つけられたようであった。

しかし、担当者として反省すべき点もあった。「会話」では、3.4で述べたように、ウォーミングアップとして発音練習を取り入れたが、内容的にはやや中途半端な感が否めない。韓国人が間違いやすい発音やアクセント、イントネーションを修正すると言っても20分程度の練習では習得・上達を望むことは難しく、いくら音声ファイルでの宿題でチェックするとは言っても限界があろう。日本語のアクセントやイントネーションを意識化することに関しては少なからず達成できたと思うものの、それをこの研修後に研修生たちがどのように実際の教室活動に活かしていくかということにまでは適切な指導が行えなかったのも、それらも合わせてもう少し時間を割くべきであった。

また、同じく「会話」では、確かに授業時間内では各研修生ともたくさん話し、意見交換も活発であった。しかし、彼らが現場に戻ったときに、どれだけ同じテーマやトピックで中高生に会話を促せるかは未知数である。今回の教材を、実際の授業でどのように活かすのかについての議論もしておくべきだったと反省している。

選択科目に対する反省点としては、作品の量をもっと増やしておくべきだったと思う。今回の研修生の日本語会話および聞き取りのレベルはかなり高く、もう少し難しい内容なりセリフなりの作品でもよかったかもしれない。レベルに応じた作品選択ができるよう、実写ドラマも含めて、作品をもっと増やしたらよかったと思う。また、すでに述べたが、機材の技術的な面でも不十分であった。これは、筆者が準備をしっかりしていれば解決できた問題であった。

6. おわりにー今後の研修のあり方について

今年度がこの研修の一つの区切りとなる。研修に参加する教師のレベルは年々高くなり、また予習や宿題もしっかりやって授業に参加するので、その点で本研修は非常にやりやすかった。宿題の量などは講師・科目によって異なるので、多くの宿題をチェックしなければならない場合は大変だったかもしれないが、まじめに授業に取り組む受講生が多いというのは、教える立場としてやりがいがあるものだと思う。このような教師としての喜びを改めて実感することができ、本研修を担当させてもらい心底嬉しく思う。

さて、本研修で成績が上位の12名は、2010年1月に来日し、一か月間の研修を行なう。この成績上位者の中には、これまで何回も日本に旅行したり、中には留学していた研修生

もいる。つまり、日本に何度も来た経験のある者が再度日本に研修に来るのである。それは、そのような規則だから、我々が意見を言うのは筋が違うかもしれない。しかし、日本の文化や日本語に大変興味があり、しかし都合や事情があって日本に行った経験がないという研修生に日本に来てもらいたいと思うのも人情であろう。

研修というものは、トップレベルの人間をさらにレベルアップするようなものもあるだろうが、もう少しでトップレベルになれる人間をレベルアップするというような形態であってもよいと思う。現状では上位よりやや劣るレベルだが、この研修がきっかけとなって上位レベルになる、そんな日本語教師が一人でも増えるような研修となるように期待したい。

注

1. 2008年度までは「中等日本語深化課程」といった。
2. このうちの成績上位者12名程度が、毎年1月に主に筑波大学を中心に日本で実施される「国外研修」に参加することとなる。
3. 初年度は一レベルで6回であったが、2年目より「中」と「上」の二つのレベル（各二つのクラス）に分けられた。許（2007）参照。
4. 「会話（中）」と「会話（上）」の具体的な内容や狙いについては、前者は高橋・小池（2007）および高橋（2008）を、後者は小野寺・杉浦（2007）および小野寺・木戸（2008）を参照のこと。
5. 筆者は、2007年度の国内研修に参加したことがあり、また毎年1月に日本で行なわれる国外研修（注2参照）でも講師として関わった経験を持つ。
6. tacc2000氏作成のフリーソフト。

【<http://www.forest.impress.co.jp/lib/pic/music/sequencer/tinypiano.html>】

（2010年2月現在）

参考文献

- NHK出版（2005）『NHK アナウンス実践トレーニング』、日本放送協会
王伸子、シリラック・ダーンワーニッチャクル、原田哲男、関光準（1987）『日本語の音声Ⅰ』、NAFL Institute 日本語教師養成通信講座、アルク
小野寺志津・木戸光子（2008）「韓国京畿道外国語教育研修院現職日本語教師研修における上級会話教材開発と2007年度授業実践の連携」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』23：89-105
小野寺志津・杉浦千里（2007）「現職日本語教師研修のための新規上級会話教材開発と実践報告」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』22：71-80
河野俊之（2009）「60分でわかる音声指導入門」『月刊日本語』22-1：12-29

- 姜 星鎮 (2006) 「京畿道外国語教育研修院現職日本語教師研修プログラムが始まるまで」
『筑波大学留学生センター日本語教育論集』 21 : 255-259
- 塩原慎次郎 (1987) 『声を出して読む日本語の本』、創拓社
- 高橋純子 (2008) 「韓国京畿道外国語教育研修院現職日本語教師研修における2007年度
「会話(中)」クラスの授業報告」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』 23 : 79-88
- 高橋純子・小池康 (2007) 「京畿道外国語教育研修院現職日本語教師研修のための教材開
発—中級会話教材制作—」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』 22 : 57-70
- 許 明子 (2007) 「京畿道外国語教育研修院現職日本語教師研修の実施報告—2006年度韓
国国内研修の実施について—」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』 22 : 47-56
- 松崎寛・河野俊之 (1998) 『よくわかる音声』、アルク
- 安川宗親 (2009) 「イントネーションの基本」、日本放送協会・日本放送出版協会編 『N
HKアナウンサーとともに ことば力アップ』 日本放送出版協会 : 112-115